

生涯学習情報誌

Life Learning

2 2018
Feb.
NO.330



「多元的共生社会を教育から考える」

異文化や様々な格差が混在せざるを得ない多元的共生社会をどう生きるか。荻宿俊文教授が投げかけた、本シンポジウム第1回から継続するテーマである。多文化共生はEUの挑戦でもあったが、あまりにも大量の難民・移民によって、イギリスやドイツでもシステム不全に陥ったとのニュースが伝えられる。アメリカのトランプ大統領は、メキシコとの国境封鎖やイスラム教徒の入国制限を公約に掲げて当選した。多元的共生社会は完全に挫折したのか、それとも道半ばなのか。多元社会の不可避性と共生社会の不可能性を、今回は教育の視点から、社会にとって教育がどうあるべきかを議論・検討してもらう機会となった。

「知らずに悩むより知って考えよう。知るためには、いろんな人とアンテナを共有し合ったほうが知識が深まる」と。

■ポジションを得ることが教育の目的か

議論の資料として2つ映像が流された。イギリスで、イスラム圏からの移民・難民がイギリスの歴史や文化を学び、難しい試験にチャレンジして市民権を得ようとしている映像。移民タウンを抑制し、イギリスの良き市民になることを目的とした市民教育だ。もう一つはテレビドラマで、進学校ではない高校に赴任した教師が、「君たちが社会や企業に必要とされるには、人間力

を育むしかない」と論ずシーン。

映像を踏まえて荻宿氏は問う。「良き市民として社会にポジティブを得ること、生きていくために人に必要とされる人間になることは、本音の部分としてはあるけれども、教育の目的がそれであっていいのか」

■情報社会と自己責任

現代のような情報社会では、個別化された便利なサービスを受けられる一方で、個人が自己責任で判断しなくてはいけない局面が増えている。それは個人が持つ自由の一面ともいえる。職業や働き方の自由度が高まったからこそ、非正規雇用や歩合制の個人請負などの不安定な仕事が増え、若者が希望を持っていないというような問題が起きていく。しかし、自己責任を完全に否定することは、個人の自由を放棄し、他人のいいなりになることを意味する。

自己責任社会で生じた格差や、自分と違う文化や価値観の人を排除するような考え

(左)荻宿俊文教授。
(右)財団理事長代理として挨拶する事業部長・佐藤梨奈。



2017年12月9日 東京大学 福武ホール

講師：荻宿俊文 青山学院大学社会情報学部教授／Ph.D. (Ed)

専門は学習コミュニティデザイン論、学習環境デザイン論、教育工学。現在、ワークショップに代表される協働的な学びの場の分析やデザインの実践研究に取り組んでいる。最近、ワークショップの学校での可能性を追求していくために、芸術表現体験活動と省察活動を組み合わせた授業デザインを地方の小さな規模の学校や地域を舞台に展開している。「青山学院大学社会情報学部ワークショップデザイナー育成プログラム」ではグッドデザイン未来づくり特別賞を受賞、このほかリアルコミュニケーションツールやワークショップデザインでグッドデザイン賞やキッズデザイン賞などを受賞。著書には「ワークショップと学び」(編) [全3巻] (東京大学出版会) など多数。

が広がっているのは、共生社会の限界、挫折を示しているのだろうか。

■教育には時間がかかる

内山節著『時間についての十二章——哲学における時間の問題——』、その第十章「近代社会の時間」が紹介された。世界で一番民主的だと言われたワイマール憲法を持ったドイツが、なぜナチズムに走ったのか。「近代的個人は、一面では独立し、自律した自由な個人であった。ところがもうひとつの面においては、すべての事柄を自分の責

任で判断し、たった一人の力で社会に立ち向かわなければならない裸の個人でもあったのである。」とする。人間は自由の獲得と放棄を繰り返してきている。共生社会の不可能解決を、あきらめることなく教育が引き受けてほしいが、教育は時間がかかることも認識しておく必要がある。

元々教育は社会の問題を考えて解決しようとするもの。学校制度の元を作ったのはコメニウスという17世紀の教育者で、世界初の絵入り教科書には、絵の下に3つの言語でキャプションが入っている。それぞれの言葉で共通の知識を習ったら、戦争を少なくする共通言語が増えるだろうと、世界平和のための教育だったのだ。近代教育で有名なルソーは著書『エミール』で、自然人(自分のため)と社会人(皆のため)を矛盾させない。自分のことも皆のことも大事で、減私奉公ではだめと言っている。

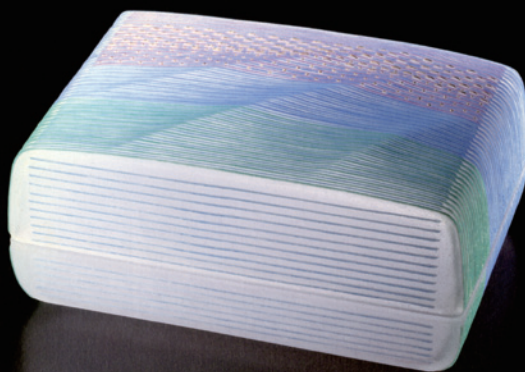
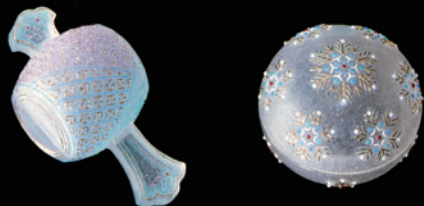
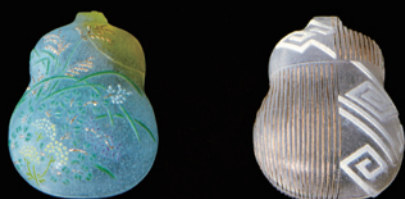
■生涯学習が大学を活性化させる

お金を払っている人以外の人が恩恵を受けるのが「正の外部性」。学生以外の一般の人が生涯学習などで大学にたくさん来てくれれば、大学が活性化され、正の外部性としての価値が生まれてくる。

最後に荻宿氏は「自律性とは一人で完結することではなく、いざというときに頼れる人がたくさんいること。誰かとかを一緒に行う関係性のある時間を持ち、できればさまざまなコミュニティに参加することを自分に課したほうがいいと思います」と締めた。

外から見つめて気づいた、日本人の気質と美意識

宮 湖上夕照

ぐい呑
(左) 雪の華
(右) 唐草文香合
(左) 小槌祥瑞
(右) 雪の華香合
(左) 瓢箪秋草
(右) 瓢箪雷文

合子 万華



合子 ペルシャ文唐草



ガラス (パート・ド・ヴェール)

石田知史

Ishida Satoshi

1972年 京都に生まれる
1992年 東京ガラス工芸研究所パート・ド・ヴェール専科卒業
1995年 アジア、中近東、中南米、N.Y.などを研究のため旅する
1998年 「石田亘・征希・知史パート・ド・ヴェール3人展」初開催
2003年 第50回日本伝統工芸展 朝日新聞社賞受賞
2006年 第53回日本伝統工芸展 日本工芸会総裁賞受賞
2007年 京都美術工芸新鋭選抜展 最優秀賞受賞
2011年 第58回日本伝統工芸展 鑑査委員
2013年 第33回伝統文化ボーラ賞 奨励賞受賞
2015年 「菊池寛実賞 工芸の現在」選定作家として出品

展示会場にて左から上野、石田、江里の各氏



聞き手: 上野由美子 (左)

古代オリエントガラス研究家。UCL (ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン) 考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年~2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切り装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

——ご両親がパート・ド・ヴェールを始めたのですね。
父・亘が京都の室町や西陣で染織圖案家として活躍していた時に、アール・ヌーボーの流れをひく作家・アルメリック・ワルター氏の作品に出会ったのが始まりです。その裸婦像の滑らかなガラスの質感に、父は感動したそ

パート・ド・ヴェール(鑄込み硝子)は、一般の透明なガラスとは違った、半透明のやわらかな光と肌触りが特徴だ。起源は古代メソポタミアに遡り、日本でも勾玉などの製造に使われていたと思われる。その後消滅するが、19世紀末のアール・ヌーボー期のフランスで蘇った。石田知史氏は、日本のパート・ド・ヴェールを牽引する先駆的の一人。12月に開催された税金の江里朋子氏(本誌2016年2月号で紹介)との二人展、「古代技法を継ぐ者たち—ガラス・截金—石田知史・江里朋子展」の会場に訪ねた。

うです。1985年から、父と母・征希によるパート・ド・ヴェールヴェールの研究が開始されます。実はアール・ヌーボー期に蘇った際には、作家が技術を秘匿したため、再び途絶えてしまったのです。確固たる技法が伝承されているわけではなく、技術的に不明な点が多くありました。自宅にガラス工房を構え、父はアール・ヌーボー期に作られたランプを真似し、茶道をやっていた母は茶碗作りから始めましたが、最初は全く手探りだったそうです。アール・ヌーボー期では色調が暗く、厚くて重量感のある置物や器が多かったのですが、私の両親は、明るい白を基調とした、新しいパート・ド・ヴェールの制作に成功しました。1990年代になると伝統工芸展で受賞するなど、現在の作品の素地ができました。

——知史さん独自の味わいはどのようにして。

両親の仕事を見ながら成長した私も自然とガラスの道に進んだわけですが、ガラス作品をアートとして捉えるか、工芸として捉えるか、その狭間で悩んでいました。そこで25〜26歳の頃、海外放浪の旅に出たのです。アジア、中近東、中南米、アメリカへと美術研究の旅を続けました。不思議なもので、各国の民族ごとに作られたものに触れて、外から日本を見つめると、かつて見た正倉院御物や漆器、陶器など日本の工芸品の美しさを自然に受け入れることができたのです。日本人が昔からずっと作ってきた伝統工芸に、日本人気質とか日本独自の美意識とかを感じました。この時の気づきが本格的に工芸作家を目指す原点となります。

京都という土地柄も影響しています。四季の自然が残り、時間もゆるやかで、自分と向き合えるのです。繊細なモノ作りが多く根付いていて、自分も「和のパート・ド・ヴェール」を目指し、情緒や品格といった日本伝統の美的エッセンスを意識しながら、静逸なるものの持つ美しさを探求していこうと思っています。

水指 山紫水明

(江里朋子氏による截金の蓋とコラボ)



六稜筥 光の祈り



茶碗 雪の華



——制作工程のポイントを教えてください。

デザインが決まったら石膏や粘土で原型をつくり、耐火石膏で型を取ります。そこに細かい絵柄や紋様を彫り込んでいきます。たとえば「笥湖上夕照」は、ブルーやグリーンの細い線が特徴ですが、これは石膏の型に刻った線が立体的なガラスの凸線として現れたものです。絵柄を彫ったら、着色部分に色ガラスの粉を入れ、ガラスの粉を糊で練ったものを型に詰めて焼成します。熱で溶けたガラスが外型と中型の隙間の隅々まで行き渡るよう、800〜900℃のピーク時に電気炉を開けて調整する作業も大事です。ガラスの粉や着色のための色ガラスが発泡しやすいなど、まだまだ発展途上の技術で、課題を解決しながら取り組む日々が続いています。

徐冷後に丁寧に型を壊して本体を取り出し、磨いて仕上げるのですが、金はその後に着色し、もう一度600℃くらいで焼成するんです。学校でガラスを学んでいた頃、吹きガラスなら1日に何個でもできるので、1つの作品に何か月もかかるパート・ド・ヴェールとのギャップに悩んだこともあります。

——江里朋子さんとのコラボが何点ありますね。

初めてなのですが、パート・ド・ヴェールの愛らしさと截金の極細の線や模様が調和して、「一人の作品のように見える」と来場者からは言われます。どちらも古代に生まれて世界に広がった技術で、そこに日本の美意識を追究しているという共通点があります。

——古代ガラスを参考にされることもありますか。

各国の伝統的な紋様を取り入れて世界観を出すことはあります。青ガラスのアメンホテプ3世とされる顔の一部を見たときは、参考というよりも、神がかったような人智を超えた凄みを感じましたね。



祝

2017年3月 筑波大学博士号(医学)取得

齊田 要さん(取得時61歳)

【論文テーマ】生体分子の前駆体遺伝子の構造、発現、進化、産生、機能および制御に関する研究
社会に役立つ遺伝子の発見・解明・産業応用を、シニアとして支援したい

■生体分子ET2の遺伝子を発見

齊田要さんは、身体の中で情報を伝える生体分子ET2(エンドセリン2)を発見した。この分子は、シグナル分子の一つで、細胞や臓器に情報シグナルを伝え、腸や血管の筋肉(平滑筋)を収縮させる効果がある。人間の体は60兆個の細胞からでき、各細胞には2万余の遺伝子が存在する。そこからET2の機能を解明するために、マウスを使って、遺伝暗号の解読を試みた。その結果、生体内における分子の合成経路、遺伝子の構造、組織・臓器における発現、分子の化学的進化、生体分子の産生調節、多様な機能の推定や制御等を、順次解明できた。これらの具体的成果に、医学的な最新の文献調査の情報を加えることで、ヒト病態(消化器や呼吸器系疾患、老化、がん、高血圧、卵巣疾患、発育不良や高齢化に伴う疾患等)の解明や診断、治療、予防に貢献できるとの考察を加え、医学的な展開を記述した。

■裏返しの研究がなんと3兆円ビジネスに

この学位論文が完成し、博士号が授与される直前に、大きなニュースが飛び込んだ。アメリカの大手企業が、スイスのベンチャー企業を3兆円以上の高額で買収するという。実はこのスイス企業が開発したのは、齊田さんが研究していた生体分子ET2等を阻害する薬剤(受容体拮抗薬)だった。

「ET2はごく微量で活性が高く、過剰に発現すると病態(癌や高血圧)になります。そのシグナルを止める分子がお金になる訳です。遺伝子の分野ではこのような競争が、世界中の大学や企業で行われ

ています。結果を出すまでにマウスやラットから臓器を取り、潰して遺伝子を取り、それを大腸菌に入れたりして、GATCの4文字を1文字ずつ読んでいきます。まるで目をつぶって象を撫でるようにして、誰も知らない部分をこつこつと探って全体像を明らかにしていくという感じで、研究はすぐに1年、2年と経ってしまふ。一時期は、ケンブリッジ大やハーバード大もリードしていたのですが、だんだん追いつかれ、今は、世界で研究が展開されています。お金にするのは企業なのですが、最近では、私のような基礎分野も、お金に直結する研究をという空気は強く感じます」

■夜遅くまで論文に没頭してしまふ

「在職中はマウスの遺伝子を解析し、医療に関する調査業務に携わりました。すでに書き始めていた



齊田さんの発見や留学に刺激を受けた奥様も研究を始めてPh.D.を取得。現在は大学で教鞭を取っているそうだ。

集大成の論文を、筑波大に籍を置き助言を頂きながら、医学的考察を加えて博士号取得に至りました。

仕事をしながらの博士号取得は、皆さん大変だと思えます。自分は夜遅くまで論文をまとめていると、楽しくなつて、つい没頭してしまい、結局寝られなくて翌日辛くなることもあります。中断するとストレスになるので、バランスが難しいです。土日は集中できますが行事も入りがちで、生活をしながら上手くコントロールするのは苦労しました」

■鈴木梅太郎に憧れた自分を思い若者支援

子供時代から生物と化学が好きだった。親は公務員だったが農業も少しやっていた、近所の人が飼っている蚕なども興味津々だった。大学では農芸化学を研究したが、だんだん医学に関心が移った。

「大学の先輩でビタミンを発見した鈴木梅太郎先生に憧れて、自分も何かを発見し産業を興えたいと思っていました。そういう意味では少し達成でき、今後さらに、それが世の中の役に立つか、アイディア次第で楽しみです。身体の中にある生体分子なので、100年後でも役に立っていると思います」

現在は、基礎研究をする若い人を支え応援する立場。そういう意味では幅広い知識が必要と考え、企業振興の専門家や経営士の資格を取得し実績を積んでいる。大学や学会でも、若い研究者の卵に、自身の経験や技術(技術英語、論文の読み方、プレゼンテーション、遺伝子工学など)を伝えている。シニアとして若い人を支援しながら、いろいろと挑戦しているところだという。